

## まつたけの 輸入動向

### 食料消費の変化に追いつかない 農水産物の国内生産

平成15年度版の農業白書は面白い図を載せている。日本人の約40年間の供給熱量と品目別熱量

自給率の図である。自給率は、通常、この供給熱量総合食料自給率をさすが、40年前の73%から近年は40%にまで下がり、先進国の中で異常に低い。自給できる米が全体の供給熱量に占める割合を低下させ、油脂や畜産物は自給率が低下したが消費はむしろ拡大し、輸出していた魚介類や自給できていた野菜等が輸入部分を拡大してきたこと等、消費の変化、それに追いつかない国内生産の様子が一目瞭然である。

「国民経済計算年報」によると、農林水産業は2001年度で名目7.0兆円（実質8.4兆円）を生産しており、国内総生産507兆円（名目）の14%にあたる。しかし驚くべきことに輸入がほぼ同額となっている。2002年の輸入額も7.2兆円で、内訳は農産品3.0兆円、畜産品1.3兆円、林産物1.1兆円、水産物1.7兆円である。農産品で最大の品目はとうもろこし2500億円（3200億円のたばこを除く）、畜産は4700億円の豚肉、林産物は3300億円の製材加工材、水産物は3000億円のえび、が最大輸入額である。野菜は農産品に入るが、最大の品目はブロッコリーで137億円、これに次ぐのがまつたけの115億円である。

**極端に低いまつたけの自給率と輸入相手国** 日本人が珍重するまつたけは、香りと食感、とりわけ香りが大事にされている。そうした味わい方は日本のみであり、食文化が近い韓国でもキムチ鍋などにも食材として入れるから、香りよりも食感であろう。中国、さらには中近東からも輸入されているが、これらは現地でも食べるがあくまでも材料としてであって、日本的な位置づけではない。

2003年の輸入額も111億円で、単価は韓国が高く、キロ14,000円である。最大輸入量の中国は5,000円、他はさらに安い。

国産はどうか。まつたけは、貿易統計は野菜だが、農林水産省所管だと林野庁の特用林産物になる。両方

### まつたけの輸入（2003.1～12）

	輸入量(t)	輸入額(円)	1kgあたり(千円)
中国	1,119	55億7605万	5.0
カナダ	371	13億5489万	3.7
北朝鮮	284	9億7079万	3.4
米国	182	7億5172万	4.1
韓国	147	20億7287万	14.1
ベトナム	38	1億3587万	3.5
トルコ	34	8879万	2.6
モロッコ	20	8465万	4.2
メキシコ	18	1億2111万	6.7
ロシア	6	785万	1.4
ブータン	2	677万	3.5
計	2,221	111億7136万	5.0

出典 日本関税協会「日本貿易月表」（品別別開）2003年12月号

の数字をみると、国産量は極端に減少し、今では国産の30～40倍の量のまつたけが輸入されている。国産単価は近年では輸入価格の7～

8倍になっている。1975年は国産で774 tあり輸入はゼロであった。しかし生育に望ましい里山の管理はなされず、また肝心の松が松くい虫の被害にあうなど、国内生産の見通しが暗かったにもかかわらず、バブルの影響で需要は伸びて、1985年では国産が820 tとピークを迎えるとともに1817 tの輸入も行われている。これ以降は国産が激減状態（2002年の国産はわずか52 t、単価はキロ43,000円）になり、一層、輸入に依存するようになって、日本の商社は世界でまつたけ探しを始めたのである。

まつたけはアカマツのみで生育すると理解されがちだが、「寒地ではエゾマツ、ツガ（マツ科）の林に生えることもある」と『広辞苑』に記されている。まつたけは根に寄生し秋に地上に自生するが、寄生先の宿主はアカマツのみではない。

カナダでは樅（マツ科）の類の林で採取され、広い中国では広葉樹林や、椎やくぬぎ（ブナ科）、なら林などでも採取されるといわれる。トルコやモロッコでは、古代レバノンで使い尽くされたレバノン杉が残っており、杉林で採れるといわれている。しかし林で採取されることと宿主になる樹が同一とも断定できない。まつたけはいろいろあるようで、遺伝子的には日本のまつたけと異なっていたり、日本のまつたけが持つ香りの有無の差になっているようで、それは価格差にも現れている。筆者の経験では1980年代、カナダの現地で食べたまつたけはまったく香りがなかった記憶がある。韓国産の高値は日本のそれに近い香りが原因かもしれない。（早稲田大学政治経済学部教授 堀口健治）